

作は、その後2度公開されたことがあり、2004年にリヴォルノで展示されたときには、10日間で実に4万人が会場に押し寄せたそうです。今後の恒久展示の可能性について、リヴォルノ市の文化評議員であるマリオ・トレディチ氏は、経済的な観点だけでなく、文化的な観点からも意義のあることだ、と前向きな様子。これまでに引き起こしてきたセッションはもはや芸術的との見方がある中、果たして贋作を堂々と公開すべきかどうか、議論は続いているということです。(nori)

彼が一貫して人間に深い関心を寄せていたことが分かる。壁画の場合も、民族の歴史や革命の理念を伝えるという性格上、人物、それも歴史上の著名な人物を中心に構成されることが多く、複数の肖像画の集合体のような表現をとることがしばしばである。ただし、壁画の場合は不特定多数の民衆に分かりやすくメッセージを伝える必要があるため、個々の人物は物語の中である一定の役割を担った登場人物として表現される。すなわち単純化されて記号化される。それに対して小画面の肖像画では、当然のことながらモデルと対面して描くため、表現はより複雑で特殊なものとなる。制作中の画家とモデルとの微妙な人間関係さえもが、そこには投影されることになる。さらに壁画の場合は、ヨーロッパの伝統的なアカデミズム絵画がそうであるように、理念の伝達という目的を第一義とするために、表現に様々な制約が生じるが、肖像画の場合は容貌の相似性という点を除けば、画家には大きな自由が与えられている。そのため、この時期に描かれたリベラの肖像画には、見るものを圧倒するような迫力には欠けるものの、モデルの内面に深く切り込んだり、自由闊達な表現を見せる作品が少なくない。とりわけ女性がモデルの場合は、豊満な肉体が持つ官能性や豊かな感情表現を見せる顔の表情などが強調され、生き生きとした生命力が画面に横溢している。一方、男性がモデルの場合は、注文主である彼らの大半が社会的成功者であることもあって、彼らが手にしている富や権力など、その社会的背景を描き出すことに主眼が置かれている。ヘンリー・ノーウェップもそのような成功者の一人である。

レイモンド・ヘンリー・ノーウェップは1894年にイギリスに生まれたが、一家は1907

年アメリカに移住している。その後1916年にハーヴァード大学を卒業し、翌年パリで外交官としての生活をスタートさせている。その後1922年からは日本、オランダ、チリなどを転々としたが、特に中南米での生活が長く、メキシコ、ボリビア、ドミニカ、ペルーなどの大使館に勤務している。このリベラの肖像画が描かれた1935年には「駐メキシコ米国臨時代理大使」という肩書きでメキシコに滞在していた。この肖像画が描かれたいきさつや、リベラとどの程度の関係を持っていたかは不明だが、ノーウェップの妻のエミリーは美術に対する造詣が深く、日本に滞在していた頃には東洋美術の素晴らしさに感激し、作品を収集すると、そのコレクションを後に生まれ故郷のクリーヴランド美術館に寄贈している。また彼女は同美術館の評議員を務めており、後に理事長職までになった人物で、メキシコ滞在中に同地で最も有名な画家に夫の肖像画を依頼するというアイデアは、あるいは彼女の発案になるものかも知れない。愛犬を傍らに従え、様々な書籍を収めた本棚を背景に、ダークスーツに身を包んだノーウェップの姿は、紳士としての品格と威厳に満ちている。膝の上には読みかけの本が置かれ、右手の指をその間に挟んでいるのは、読書を中断してポーズをとっていることを強調している。すなわちこの肖像では、富や権力ではなく、モデルの知性が何よりも表現されているのである。「物静かで、威厳に満ち、時に機敏な判断を下す、まさに外交官のお手本のような人物」と評されたノーウェップの姿が、抑制された色彩と厳格な構図の中に、見事に表現されている一点である。

男性肖像画のお手本のようなノーウェップの肖像とは対極的ともみえる作品もある。

1944年に描かれた《婦人帽子屋(アンリ・ド・シャティヨン)》(図2)がそれである。明るく華やかな色彩で全体が統一された画面の中では、スーツを着た後ろ姿の男性が、壁一面を覆う巨大な鏡の前でポーズをとっている。ピンクのリボンがついた帽子を手に取り、頭に当てたその顔には満足そうな笑みが浮かんでいる。手前のテーブルには、色とりどりの様々なデザイン的女性用の帽子が置かれ、その横にはリベラが愛したカラーの白い花が咲き誇っている。色彩といい、構図といい、画面に散りばめられた様々な小道具といい、ノーウェップの肖像とはあらゆるものが対照的であるが、それはもちろんモデルとなっているシャティヨンの個性を表現するためである。モデルのアンリ・ド・シャティヨンは、イギリス人の父とフランス人の母との間に1907年にパリで生まれている。メキシコにやって来たのは1942年のことで、帽子店を開いた彼はたちまち大成功を収め、やがてドレスのデザインにも手を伸ばし、メキシコだけでなくアメリカでも多くの顧客を抱えている。名古屋市美術館には同じモデルをマリア・イスキエルドが描いた《旅人の肖像(アンリ・ド・シャティヨンの肖像)》(図3)があるが、ここでもモデルの特徴を表す小道具として帽子が重要な役割を果たしている。



図3 イスキエルド《旅人の肖像(アンリ・ド・シャティヨンの肖像)》1940年頃 名古屋市美術館蔵

リベラの描いたシャティヨンの肖像に戻れば、モデルを務めているのは男性だが、画面に満ちているのは明らかに女性的な雰囲気である。たとえシャティヨン個人の経歴について何の知識も持ち合わせなくとも、この画面を見るだけで描かれた男性がどのような人物なのかはすぐに感じ取ることができるだろう。優れた肖像画が、一瞬にしてそれを見るものにモデルの人柄を感じさせるのだとすれば、ノーウェップとシャティヨンの対照的な2枚の絵は、リベラの肖像画家としての卓越した手腕を証明している。あの偉大な壁画群がたとえ無くとも、リベラは間違いなく20世紀を代表する画家としての評価を手にしていたであろう。(F)

*本稿執筆にあたり、ヘンリー・ノーウェップの経歴について、名古屋アメリカン・センターのご教示をいただきました。ここに記してお礼申し上げます。

展覧会の舞台裏

作品の運搬と展示 4

貴重な美術品の扱いには、常に強い緊張感と集中力が要求されます。作品を移動中のトラックの中で、運送業者の方々と雑談をしていると、「こういう仕事をしていると寿命が縮まりますよ」という話をよく聞かされますが、寿命が縮む思いをするのは学芸員も同じです。とりわけ学芸員が神経を張りつめるのは、作品の受け渡しの場面です。いったん梱包が済んで、木箱の中に納められてしまえば、あとは運送業者の方々にお任せし、それを見届けるしかありませんが、その前段階の、作品の所有者との受け渡しの段階では学芸員が一切の責任を負わなければなりません。受け渡しの際の何がそれほど難しいのか？ 日常生活の中でも、物の貸し借りは頻繁に行われているわけですが、美術品の貸し借りはそれら日常の物とは全く次元が違います。1点が数千万、あるいは数億円というような高価なものだからということもありますが、それ以上に美術品は人類の共通の財産であり、できる限り良い状態で後世に送り伝えていかなければならない、という使命があるからです。そのため、受け渡しの際の作品の状態確認は厳密を極めることになります。作品を借りる側は事前に「コンディション・レポート」なるものを用意して受け渡しに臨みます。これは作品の図版の写真、あるいはカラーコピーなどをA4からB4程度の大きさの台紙に貼ったもので、作品の題名、

制作年、材質などの文字情報をあらかじめ書き込んでおきます。そして所有者との受け渡しの際に作品の状態を細かく確認しながら、その全てを記録していきます。画面のどこに傷や亀裂、絵の具の剥落があるのか。額の状態はどうか。キャンヴァスは額にしっかりと固定されているか。額の裏蓋等に貼られた過去の展覧会への出品を示すシールが何枚貼られているのか。等々、借用する作品の現状を一切切記録したもの、それが「コンディション・レポート」になります。当然この点検、確認にはかなりの時間が必要になります。大きな作品であれば1点の点検に30分以上の時間がかかることも珍しくありません。なぜこれ程までに丁寧に状態を確認しなければならないのかと言えば、一つにはその作品をどの様に梱包し、移動し、展示するかという、作品の扱い方を決める重要な手がかりになるからです。「コンディション・レポート」はしばしば、お医者さんのカルテに喩えられますが、患者さんの状態を正確に把握していなければ的確な処置ができないのと同じで、作品の状態を十分に理解していなければ適切な梱包や展示はできません。ところが個人コレクターの中には、この入念な点検を嫌がる方がたまにみえます。照明を当てながら長時間をかけ、時にはルーペまで取り出して微に入り細に入って行う点検が、まるで自分の大切な作品のあら探しをされているようだと感じて、「もうその辺でいいでしょう」と言い出されるわけです。コレクターの機嫌を損ねてはいけませんが、しかし、いい加減な点検をするわけにもいきません。いい加減な点検を行うと、後で大きな問題となって跳ね返ってくる可能性があるからです(続く)。(F)

展覧会 現在進行形

静けさのなかから
—桑山忠明・村上友晴—展
2010年4月24日(土)～7月4日(日)

新しい世紀を迎えてから、すでに10年が経とうとしています。「戦争の世紀」が終って、新しい「平和の世紀」が訪れることを期待しながらも、9.11の悲劇で幕を開けた21世紀の世界は、政治的にも経済的にも、極めて不安定な危機的状況にあります。急速に社会的な格差が広がった日本でも、政治・経済・文化な

ど、あらゆる分野で難題を抱えて苦しんでいます。過剰な物質と過激な色彩に溢れた現代社会に生きている私たちは、日常生活のなかで常に喧騒に晒され続け、一瞬たりとも心身の休まる時間がありません。朝から晩まで絶え間なく時間に追われ、仕事も余暇も食事も睡眠も満足にできない毎日に忙殺されて、反射的な瞬時の判断や金銭的な損得の勘定ばかりが求められ、自己の存在や物事の本質について考えることも、優しい気持ちで愛を語り、お互いを思いやることすら忘れられています。このような現代社会において、貴重で稀有な「救済の場」となるのが美術館です。広々とした静かな空間のなかで、ゆったりとした時間

感想ノートから

躍動する魂のきらめき—日本の表現主義
2009年8月25日(火)～10月12日(月)

本展覧会は、近代化の中で個人や個性が初めて注目され、また生命感や人生観が形成された1910—1920年代の時代精神を、洋画、日本画、彫刻、デザイン・工芸、建築、写真、演劇・舞踊、映画など多岐に亘る表現領域を横断し、500点にも及ぶ作品や資料によって、「表現主義」の思潮にたどろうとするものでした。これまで「大正期の個性派」という名称の下に断片的に紹介されてきたこれらの表現については、「暗い」「重苦しい」という評価が付いてまわりました。そこで、展覧会のポスター制作に当たりましたは、そうした先入観を少しでも払拭すべく、デザイナーの方と話し合いました。その出来については内部でも賛否両論でしたが、ご来館いただいた皆様の目にも留まったようです。「ポスターにひかれて見にきました。80年代っぽい雰囲気の作品が多いのかなと思ってましたが、予想以上にシックで重厚な作品が多く、予想していたのとは違っていました。楽しかったです！」(無記名、9/8)

「ポスターのデザインがとてもカッコ良かったです。ドイツ表現主義の映画上映会もうれしい企画。「生命主義」という切り口がとても興味深い一方で、カタログを熟読してもイマイチよくわからなかったのが、鈴木貞美先生のトークを企画されたのはすばらしかったです。」(31歳、男性、9/21)

ここまで紹介すると、正しく“自画自賛”以外の何ものでもありませんが、こうしたご意見には本当に勇気付けられます。ありがとうございました。

個々の作品については、今回、初公開となった長安右衛門の装飾文様《煩惱》に、とりわけ高い関心が寄せられたようです。「長安右衛門さん、感動のあまり涙が流れました!!」とか、「長安右衛門さんの鳳凰と仏様と小さな人間と、そして言霊の絵画が素晴らしかった。人間がちっぽけな存在であるけれども、その生命のパワーはすさまじいし、仏さまもとても穏やかな表情をしていますよね。感銘を受けました。」(無記名、9/15)

こうしたご賛同の声の一方で展示に関するご指摘も頂戴いたしました。「照明の具合で作品が光ってしまって見づらかったです。それを除けば、ミニマムな雰囲気作品たちのもつ傾向に合っていて良かったと思います。」(チェザーレさん)

照明に関しては、複数の方から「見づらい」「良くない」というご指摘を頂戴いたしました。次回以後、皆様に集中して見入って頂けるような工夫と環境整備に務めてまいりたいと思います。(J.T.)



長安右衛門 装飾文様《煩惱》(部分)

の流れに身を任せて、自己の眼と心を開いて、美術作品と向かい合うことで、そこから密やかに現れてくるものや微かに聞こえてくるものを感じる体験は、持続的で強烈な刺激に摩滅、消耗した私たちの心身を快復するためには、何よりの良薬になるでしょう。

今回の展覧会では、名古屋市美術館の企画展示室にいまだかつてなかった素晴らしい空間を実現して、そのなかで二人の現代美術家の世界を連続個展の形式で紹介します。

桑山忠明(1932～)と村上友晴(1938～)は、それぞれ日本画から出発して、現在ではミニマル・アートの文脈において、国際的にも高く評価されている美術家です。この二人が長い時間を掛けて、ゆっくりと制作の歩み

を続け、少しずつ作品を積み重ねるなかで、築きあげてきた二つの世界(それは共通性を持ちながら対照的なものですが)を連続して鑑賞することは、私たちが生きていくために大切なことを思い出すことのできる絶好の機会になるでしょう。

神社の境内や寺院の堂宇のように、教会の礼拝堂やモスクの聖堂のように、あるいは古代遺跡の神殿や砂漠の洞窟のように、二人の美術家の世界が広がった美術館のなかで、これまで生きてきた人間の気配が漂う清らかな空気に満たされた「静けさのなかから」密かに現れてくるものと出会い、微かに聞こえてくるものと対話を交わすことのできる貴重な時間を過ごすことができるでしょう。(sy)

どこがおもしろい?!

今回のテーマは、愛知県稲沢市出身の画家・荻須高德が、1960年頃にパリ郊外の街オーベルヴィリエに建つ洗濯場を描いた作品です。2008年10月11日－2009年 2 月 8 日の展示期間にお寄せいただいた皆様のご意見を紹介します。(nori)

「汚い壁なのにきれい。本ものの壁はもっと汚いかんじだったんだろうなあ。でも彼の目から見て、こんなふうにきれいに見えたのかな。見ててあきない絵です。」(?さん ？歳)

「生活感がすごいでてる。公共の場、みんなが使う場所だからはり紙がたくさんあるのかな??下町、ちょっと田舎の風景が雰囲気があって、明るいきれいなパリの街並みじゃない街の姿を見ることができる作品だと思う。」(ともみさん 20歳)

「フランス(?)て、もっと華やかな場所だと思っていましたが…旅行案内では知りえない街の姿をこうして絵画に教わる。風景画を見る楽しみの1つです。」(?さん 15歳)

「さびたような? せっかく場、誰がつかうかも知らないけど、上のやねのほう、てっこつのほうがあるだけで、雨がふったときどうするのか? 中でどうせんとくするのも不思議。」(遠山さん 9 歳)

「やねがかたっぱしかなない」(けいさん 6 歳)

「ドアがいっぱいあっておもしろい」(凌太さん 7 歳)

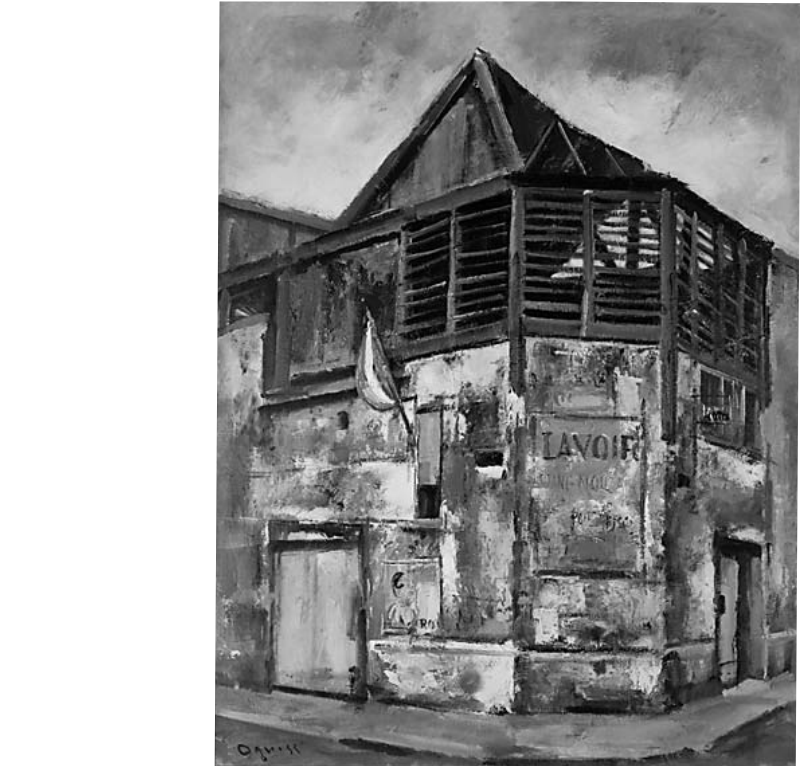
美術館Q&A

特別展を見ての質問でしょう、「他の美術館から、どうやって絵を運んでくるのですか」(守山区HSさん)「この絵はどうやってまわってくるのですか」(宮城県仙台市MSさん)など、作品の運び方を考えてしまう方は多いようです。最近の展覧会「だまし絵展」に出品されたアルチンボルトの《ルドルフ 2 世》は、スウェーデン、ストックホルムから運ばれてきました。これまでの最も遠距離の作品借用先は、地球の裏側、ブラジルのサンパウロでしょう。2001年の「ルノワール展」に、サンパウロ美術館から出品されています。作品を運ぶときに気をつけるのは、「作品

郷土の作家たち

堀尾 実(ほりお みのる／1910－1973)

堀尾実は、1910年10月 9 日に名古屋に生まれ、幼い頃より森村宜穂の画塾で大和絵を学び、高等小学校を卒業する際に制作した作品が東海美術協会展に最年少で入選したことから、日本画家を志した。この頃から京都に旅行して、国画創作協会展を見たり、雑誌『白樺』を読むようになり、花鳥風月の世界ではない新しい日本画の創造を意識するようになった。1930年には京都市立絵画専門学校(選科)に入学して、博物館などで古典絵画を学んだが、卒業直前の1934年に中退して、上京すると、独立美術協会美術研究所に通って、福沢一郎や瀧口修造らと出会い、ヨーロッパの前衛美術(シュルレアリスムや抽象美術)の影響を受けた。1940年には日本画の革新運動を目指した新美術人協会の第3回展に、龍安寺の石庭の抽象性を反映した作品《庭園》で初入選を果たした。戦後は、創造美術協会の結成に共感して、1948年の第1回展に抽象絵画の《作品B》を出品して話題となった。翌年には、日本アヴァンギャルド美術家クラブにも参加して、第2回モダンアート展に《作品B》を出品するとともに、第2回創造展にも《作品A》などが連続



荻須高德《洗濯場(オーベルヴィリエ)》1960年頃

「かじがおきて、ぼろぼろになった家にみえました。それか、人のいない、ぼろくなった家、もしくはつぶれたおみせっぽいかんじがしました。」(?さん ？歳)

「これだけ暗いと、『洗濯場』というよりも、あき家でねことなどのすみかになってそう。でも、ポスターをはってあるところを見ると、ああ一応やくにたってるんだな、と思った。これだけいんきくさいと、じめじめしていて、洗濯があんしんしてあらえないんじゃないかと思った。なんか『ムカデ』『ゲジゲジ』『ゴキブリ』がいそうでおもしろい。」(詩織さん 10歳)

「100年くらい建っているかんじ!!でも、昔は

が損傷しないようにする」、これに尽きます。損傷の原因はさまざまです。衝撃はもちろん厳禁ですが、作品が伸縮したり結露するのを防ぐために温度や湿度の変化も避ける必要があります。作品は、何らかの衝撃があっても作品に伝わらないように緩衝材(断熱材を兼ねる)で保護されて、しっかりとした大きなケースに入れられます。

陸路はほとんどの場合、専用のトラックを使用します。金属のバネではなく、微振動が伝わりにくい空気バネのサスペンションを使用し、エアコンのついた荷室を備えたトラックです。日本国内へは、空路か海路どちらかで入りますが、多くは空路、つまり飛行機です。船では時間がかかりすぎます。飛行機には旅客便と貨物便、どちらもあり、特に大きな作品は、F1レーシングカーも積むことの

入選して、名古屋を代表する日本画家となり、第4回中部日本美術協会展に《フィロ》を出品した。1951年には、美術文化協会の会員として迎えられて、第11回から第14回展まで、抽象的な表現による日本画を制作・発表した。しかし、1954年には内紛のために退会、翌1955年に竹田大助、水谷勇夫らとともに、前衛絵画グループ・匹^ひ亞^あ会を結成して、1960年の第7回展まで、東京と名古屋で活発にグループ展を開催して、前衛的な日本画運動を展開した。

1960年代以降は、独自の絵画理論・技法の探究を深めて、独創的なフォト・コラージュや墨流しなどの実験的な作品を制作して、1973年には集大成としての《薔薇》連作による個展を開催した後、7月14日に死去した。(sy)



堀尾 実《フィロ》1950年

人気があっても、今はイマイチ的なかんじになってしまった…と思う。私は好き!!!ぼろくても、中に居る人を想像してみたら、ひげのはえたおじいさんが出てきた。だから、想像して、みてるのもいいと思う!ボロいところが、気をひくと思う!」(?さん 14歳)

「現在のコインランドリーのように黙ったまま機械の止まるのを待っている若者たちの集まる場所ではなく、フランスのおばちゃんたちの社交場だったのかしら? 井戸端会議の内容をそっと聞いてみたいような気がします。フランスのおばちゃんたちはどんなお話をしていたのかしら?」(日本のおばちゃん 60歳)

できる貨物便で運ばれます。いずれも空調の効いた荷室で運ばれます。でないと、飛行機の飛ぶ上空1万メートルの外気温度は摂氏零下50度くらい。そんなところに作品をさらすわけにはいきません。美術館の収蔵庫内と同じレベルとは言いませんが、人間が快適に過ごす機内と同等の温度湿度を保ち、多少の変動は緩衝材で熱伝導を防いで、外気の影響をなるべく少なくします

飛行機の着陸の衝撃もかなりですが、飛行場内を台車に載せられて運ばれるときの振動は最悪です。舗装も悪いうえ、台車にはサスペンションがついていないのです。おそらく作品輸送中で最も激しい振動ですが、それでも破損ないように梱包されています。

運ぶときには、原則として専門家がついていきます。多くは学芸員ですが、保管保存の

久野利博(くの としひろ 1948－)

久野利博は愛知県に生まれ、この地方で継続的に制作してきた作家である。1974年、名古屋造形芸術短期大学専攻科を修了し、1970年代半ばから活発な制作活動を行なう。1986年、名古屋市芸術奨励賞を受賞。1998年にはサンパウロ・ビエンナーレに出品している。現在は制作を行いながら名古屋芸術大学で教鞭をとり、後進の指導にもあたっている。

1980年代初頭の作品では、自身の身体にロープを巻きつけ、その痕跡をロープによって残すという試みを行なっている。ここでは不在であることが久野の身体を意識させ、空間と身体との関係性を考えさせる。また、身体をものさしのように使って空間の距離を測るパフォーマンスによって、空間の中にある身体が存在を示すことも試みている。

1988年には、名古屋の若宮大通りにコンクリートと木でできたベンチを設置する。彼は、自分の仕事について、次のように語っている。「道端にある雑草は、見る者が意識していない時には目立たないが、意識すれば雑草の存在感が浮かび上がる。私の仕事も雑草のような目立たない存在でありたいと思う。」風景の中に違和感なく溶け込み、過度の自己主張をしないベンチの造形は我々がふと立ち止まり、意識をそこに向けることで初めて存在として浮かび上がってくる。

「扉を開けると、汗いっぱいの体の大きな女の子の人が、たくさんおしゃべりしていそう!!!洗たく物の泡がなかなかおちない～ような感じ です。はっきりした黒い屋根と黄色の壁がカッコいい。」(たまさん 39歳)

「屋根のカゲとかカベの色とかで、あやしいカンジがただよってるなあ。まっすぐから見たのではなく、ナナメから目線がカンジ出てるー。全体的な色の組み合わせも暗いカンジで気に入った。空が暗いのが気になりますね。せんたく物、ほせるかね?」(たな ひろさん 14歳)

「曇り空と建物との調和がとれていて実によい作品だと思いました。この建物から、この街全体の暮らしが想像できました。勝手に想像ですが、この街には活気がなく、廃れていく一方、昔から住んでいる人々は、毎日ここに通り、今後の展望について憂いたりしている光景が目に見えました。全体として、悲しい、重い感じがしました。」(マリヲさん 22歳)

「最初はやごれた古いところに見えるけど、よく見るといろんな明るい色をつかっているところがおもしろい。」(K-ちゃん 10歳)

「一見洗濯場に見えないものの、題名を見てからもう一度見てみると洗濯場に見えてくるのが不思議ですね。油絵らしいゴテゴテ感が好きです。油絵挑戦してみようかな…。」(?さん ？歳)

「雑に描いてあるようにみえてすごく細かい。描けそうにみえて全然描けない。油って描きにくそうに見えるんだけど、実際に描いてみるといがいに描ける!挑戦するのもいいかも!しれない。」(やま.さん 12歳)

専門家の場合もあります。この作品に随行する人をクーリエ(courier)と言います。輸送中にどんなトラブルが起こるかも知れません。そのときに適切な判断と措置をとるために随行するのです。日本国内では、こちらから出向いて作品を借りにいきますが、海外の複数の場所からとなるとすべてに出向くわけにはいかず、先方の美術館の方をお願いして、作品についてきてもらいます。

到着しても箱をすぐには開けません。美術館の展示室に1日ほど安置しておきます。これは、現地の展示室の温度湿度などの環境に時間をかけてなじませるためです。

これを往復繰り返し、作品はもとの美術館に戻るのです。(hkh)

※HSさん、MSさんには「コレクションを極める」展チケットをプレゼントします。

このようなスタンスは、その後の作品にも引き継がれていく。1992年の「セブン・アーチスツ」展でも、ビニール袋に砂を入れて円環状に積み上げた作品によって、さりげない日常的な素材を通じて空間を意識させることを試みている。その後の作品では使用する素材が多くなり、より観客の動線を意識し、空間を体感させるものへと変化していく。火山灰、生番線、おたま、水引、壺などを用いて、呪術的な雰囲気も漂わせる作品が生み出されていった。久野利博の作品は、我々の住む世界の中で、人や物がそれぞれの距離感を保ちながら存在していることを知らせてくれる。その中で、空間と一体化して生き、自身の確固たる存在を確認するという人間本来の在り方が回復されるのではないだろうか。(akko)



久野利博《Untitled》1998年/2004年

展評

2009年10月10日(土)~12月27日(日)
豊田市美術館

近代の東アジアイメージ

日本近代美術はどうアジアを描いてきたか

アジアは日本の近代美術にとって外すことのできない重要な事項であるにもかかわらず主題として取り上げにくい対象です。「富国強兵」「脱亜入欧」のスローガンのもと、明治から第二次世界大戦の敗戦までつづいた日本の侵略政策がもたらした「ゆがみ」が、政治や経済の局面だけでなく、美術の「表現」と「理解」にも取り扱いに心配りを求める感情にはたらきかける「しこり」を残しているからです。その「ゆがみ」は、日本がアジアを眺め、アジアが日本を眺める視線に今も陰りとなっています。

この展覧会で取り扱われているのは、中国、台湾、朝鮮半島であり、タイトルの「東アジア」、サブタイトルの「アジア」との整合性が問われるのですが、これには企画者の論理の階梯を認めるべきなのかもしれません。展示の章立ては日本の近代美術の展開から拾い上げられており、日本の作家の眼差しと心情を提示する構成です。作家にアジアがどのように作用したかということが丁寧に掘り下げられていることが良く分かる展示ですが、作家の経歴について知識を持たない人にはアジアに向きあう作家の視線と姿勢がどのような背景からかたち作られたのが十分には分からない、そのために作

品の表象するものが深みを持って受け止められないのではないかという印象を持ちました。

年若い鑑賞者の多くは、日本の近代美術に中国、台湾、朝鮮半島を主題にした作品がある、その歴史的背景を知りません。その点で、また、最終章として提示された現代の作品に企画者の真意を読み取るなら、アジアからの問い返しや、私たち自身の今日的な内省がもっと提示されることが望ましいと思えます。「国益」という言葉がためらいなく政治家の口にのぼり、東アジア共同体の設立が新たに呼びかけられる今日、高嶺格の作品が提示するものは極めて真っ当です。問われているのは私たちであり、鏡である美術はアジアに向かっても私たち自身を映し出しています。この展覧会から得るべきは、アジアイメージの背後にある近代日本でしょう。

果たしてそれは容易に行い得たのか。兎にも角にもこのような展覧会を実現したことは評価されるべきでしょう。(み。)



藤島武二 《花籠》1913年
京都国立近代美術館蔵

かには度重なる説明を無視して携帯電話のカメラ機能で写真を撮ろうとする人や、自分の席が気に入らず花道の端に腰掛ける人(!)もいたのですが、常に機転を利かせて明るい声で話しかけ、笑顔で応対するスタッフには何とも言えぬ清々しさを覚えました。尾籠な話で恐縮ですが、場内に設置された簡易トイレの誘導においてさえ、彼らの言葉は端切れよく適度に笑いを含んだ小気味のよい節回し。少しの待ち時間も退屈させない雰囲気づくりは見事というほかありません。

今でこそ、よそ行きの着物で出かけるようなイメージがありますが、歌舞伎はそもそも庶民の娯楽として発展したものです。『幡随長兵衛』の序幕さながらに、急に声を荒げて難癖をつける客も珍しいことではなかったのでしょう。江戸時代の村山座では「舞台番」と呼ばれる役回りがあり、客席でのハプニングを即座に解決して他の客を落ち着かせ、舞台上の役者に向かって「どうぞお続けになって」と再開の合図を送ったといいます。その粋なふるまいの精神を平成中村座に蘇らせたのだとしたら…座長・中村勘三郎は、芝居小屋の伝統を《舞台上の演出だけでなく、観客や場内の賑わいなど芝居を支えるすべての要素を包括したものとして伝えたい》と考えているのかもしれませんが。単なる歌舞伎公演とは一味も二味も違う平成中村座、来年はどこで観られるのか楽しみです。(3)

作品の良さや面白さが伝わり、楽しんでもらえるだろうか？」メンバーは事前に意見交換や勉強会、実地練習を重ねて当日に備えました。

幸い当日は朝から夕方まで多くの方々が、作品を真剣に覗き込んだり、ボランティアからの問いかけに率直な意見や感想を述べたりと、20分近いトークの間も飽きることなく耳を傾けてくださいました。11時と14時に行った建物ツアーも参加者多数で「普段はやらないんですか？」といった嬉しい問合せをいただくなど、トークを担当したボランティアもそれぞれに手応えを感じ、今後の活動への原動力となったようです。

ボランティアによる常設展ギャラリートークは、開館日の11時と14時に開催しています。1人で見ていても気づかない作品の魅力、当館ボランティアと一緒に探してみませんか？(3)



展評

2009年11月3日(火)~(2010年)1月11日(月)
碧南市藤井達吉現代美術館

画家としての藤井達吉

ー創作の原点を求めてー

作家としてのキャリアを七宝作家としてはじめた藤井達吉は、生涯を通じて工芸と絵画の両分野で創作し続けた。碧南市藤井達吉現代美術館では、昨年の開館記念展「藤井達吉のいた大正一大正の息吹を体現したフェウザン会と前衛の画家たち」で、岸田劉生、岡田三郎助などの作品も併せ紹介し、大正期の前衛美術を紹介する中で藤井達吉の全体像を扱っていたが、今回の展覧会は、画家としての藤井にスポットを当てたものである。

もともと器用で、工芸と絵画の間を行き来したためか、近代日本の美術を語る時にその名前が登場しても、中途半端な取り上げられ方であったようだ。しかし、この展覧会は、「画家としての藤井達吉」の非凡な力量を知ることができる機会である。

作品は、大正前期頃の油絵作品からほぼ年代順に展示されるが、日本画も描き出した大正後半のあたりは圧巻である。大正10年の院展の入選作と翌年の同展入選作の下絵が紹介されている。当時の院展は、速水御舟、小林古径、前田青邨ら近代日本画の巨匠が活躍し、

イベントガイド

■特別展 コレクションを極める

名古屋市美術館には、現在4000点を超える作品が収蔵されていますが、この展覧会では、「人物」「風景」「静物」をキーワードに90点を選び、収蔵方針の粋を超えたアプローチの方法で、作品のあらたな魅力を引き出します。優れた作品は、私たちに豊かな解釈と、視覚にとどまらない複雑な喜びを与えてくれます。だから美術は面白い。さあ、あなたも名古屋市美術館のコレクションを極めてください。

会 期：2月6日(土)～3月28日(日)

会 場：第1・2企画展示室

入場料：一般600円(400円)、高大生500円(300円)、小中生 300円(100円)

※()内は20名以上の団体料金

※特別展入場券で常設(企画)展もご覧いただけます。

【関連催事】

○連続講座

講師：深谷克典(名古屋市美術館学芸課長)

場所：美術館2階講堂(定員180名 先着順 入場無料)

①「人物の魅力を探る」2月21日(日) 午後2時～

②「なぜ風景を描くのか」3月7日(日) 午後2時～

③「これも静物？あれも静物？」3月21日(日) 午後2時～

○ミュージアムコンサート

「音楽と美術のコラボレーション」

展示作品から受けたイメージをもとに、楽団員がプログラムを構成します。お楽しみください。

日時：2月28日(日)午後2時～

場所：美術館地下ロビー(入場無料)

演奏：セントラル愛知交響楽団

○ボランティアによるギャラリートーク

開催日：2月＝17日(水)、18日(木)、20日(土)、23日(火)、24日(水)、27日(土) 3月＝2日(火)、4日(木)、6日(土)、11日(木)、12日(金)、18日(木)、19日(金)、20日(土)、24日(水)、25(木)、27日(土)

開始時間：午前10時30分～／午後1時30分～

※展覧会入場券でご参加いただけます。当日、会場入口にお集まりください。

※都合により休止することがあります。

審査は非常に厳しかった。大正8年の院展では応募434点のうち入選はわずかに6点という異常ともいえる厳選ぶりである。その頃に入選を果たしているのである。琳派的要素を基礎にし、写実性に装飾性を加えた作品は高い完成度を誇っている。

もちろん、工芸的あるいは工芸と融合した作品もいくつも出品され、また余技的な作品も紹介されている。最晩年の、ほとんど抽象絵画に近い水墨画《四国遍路》や《山十題》(絶筆)では、装飾的な印象の強い藤井芸術に全く別の面があったことに気づかされる。「彼の精神的な世界」という、普通にはうさんくさいカタログの記述も、ここでは納得してしまう。

藤井達吉は、評価が低かったわけではない。近代工芸、洋画、日本画、いずれの文脈においても位置づけが難しかったゆえ、評価することを避けられてきたのではないか。彼はこれまで損をしてきたのだ。(hhk)



■常設企画展 生誕100年記念 堀尾実展

創造美術協会や美術文化協会などに参加するとともに、1955年には水谷勇夫、竹田大助らとともに前衛グループ「匹亜会」を結成するなど、戦後の名古屋で新しい日本画の創造を目指して抽象的な表現を探究した、前衛日本画家・堀尾実(1910～1973)の芸術を紹介します。

会期：1月9日(土)～3月28日(日)

会場：常設展示室3

○展示解説会

日時：2月7日(日) 午後2時～

講師：山田 諭(名古屋市美術館学芸係長)

場所：美術館2階講堂(定員180名 先着順 入場無料)

■常設展

○名品コレクション展Ⅲ

会期：1月9日(土)～3月28日(日)

エコール・ド・パリ：ポートレイトの視線

メキシコ・ルネサンス：交錯する視線

現代の美術：まなざしの温度

郷土の美術：風景への視線

■コレクション解析学2009-2010

学芸員が当館のコレクションから特定の作品をとりあげ、その魅力などを紹介する講座です。 14時～ 講堂 先着180名 無料

○第5回 1月31日(日)

講師：竹葉 丈(名古屋市美術館学芸員)

作品：ベン・シャーン《友達の写真屋》1945年

演題：「写真の視線、絵画の情景」

■名古屋市美術館「キッズの日」

○なりきりアーティスト

よく見て考えて「つくって」楽しむプログラム。

対象：小学生

参加費：1名300円

定員：各回30名

日時：2月28日(日) 10時～12時

申込締切：1月31日(日)

■あいちトリエンナーレ2010

会 期：2010年8月21日(土)～10月31日(日)

会 場：愛知芸術文化センター・名古屋市美術館・長者町地区など

※お問い合わせは、あいちトリエンナーレ実行委員会事務局へ(愛知芸術文化センター内)<http://www.aichitriennale.jp>

※申込方法など詳しくは当館ホームページ(<http://www.art-museum.city.nagoya.jp/>)をご覧ください。

(A)

イベントレビュー

ボランティアによる「まると1日ギャラリートーク」

当館ボランティアの活動開始10周年について昨年アートペーパー79号でご紹介しましたが、まだまだ活動の勢いが衰えることはありません。さる10月4日(日)、名古屋まつりと連動した常設展無料開放にあわせ「まると1日ギャラリートーク」を実施しました。

より多くの方が気軽に参加できる方法を検討し、今年は10時から16時までの間、毎時0分にはエコール・ド・パリとメキシコ・ルネサンスのコーナー、毎時30分には現代の美術と郷土の美術のコーナーで、作品各1点について来館者との対話しながら作品の魅力を探っていく集中トークを展開することにしました。対象となる作品は当館の代表的なコレクション。ボランティアには馴染みの作品ですが、名古屋まつりのお客さまの中には名古屋市美術館に初めて来館される方もいます。「どのような切り口で紹介したら、初めてご覧になる方にも